

# ライン地方のあるギムナジウム

## (1)

小 峰 総 一 郎

<p style="text-align: center;">目 次</p> <p>はじめに</p> <p>1. ギムナジウムとブラハトのギムナジウム研究</p> <p>    (1) ワイマール時代のギムナジウム</p> <p>    (2) ブラハトとその研究書</p> <p>    (3) 本書の構成と出色</p> <p>2. リューテン上構学校の教育</p> <p>    (1) 上構学校の成立</p> <p>        ①町の状況、町民層 ②師範学校(1876)から上構学校(1926)へ</p> <p>    (2) 上構学校の教育</p> <p>        ①校長——シュニーダーテューンス、フルック</p> <p>        ②教育内容 ③生徒たち</p> <p>3. まとめ</p>	 <p>フリードリヒ・シュペー＝ ギムナジウム (現在)</p>  <p>ブラハト校長 (2005. 6 共に筆者撮影)</p>
--	---

### はじめに

教育改革議論が盛んである。中でも、国際社会で活躍する「人材」、「エリート」養成へのニーズから、青年期の教育問題が、学校制度問題としては中等教育・大学教育をめぐる議論が活発である。そのとき引かれるのが、ドイツのギムナジウムである<sup>1</sup>。世界の教育ベスト10で「高校ならドイツ」と言われる<sup>2</sup>。そこから、エリートと大衆の学校制度が截然と分かれたドイツの中等教

1 文部科学省「我が国及び諸外国の学制について」(第14回教育再生実行会議資料, 2013年10月31日)  
<http://www.kantei.go.jp/jp/singi/kyouikusaiei/dai14/gijisidai.pdf>; 黒田多美子「ドイツにおける教育改革をめぐる論議と現状:ハンブルクの事例から」(『獨協大学ドイツ学研究』62, 2009.9), など。

2 『ニューズウィーク日本版』, TBS プリタニカ, 1991年12月5日号, 参照。

育制度は、〈平等〉を推進してきた日本の戦後教育見直しに光明を投げかけるものと受け止められ、ギムナジウムをモデルにして、エリート学校としての中高一貫学校「中等教育学校」も創設された（1999年＝平成11年）。だが、日本と異なり、ドイツでは学校教育制度と職業教育制度とがセットとして機能しているという社会的・産業的背景が存在しており、さらに、個々人に応じた多様な教育を保障するのが真の平等だとするキリスト教的教育権理解、ならびに教育制度に対する国民的的了解、言うなれば文化的背景が厳然として存在するのである<sup>3</sup>。

ところで、ドイツのギムナジウムもまた、ドイツ社会のありようを反映してその相貌を変じてきた。そして、社会の変革期には従来のギムナジウム像を脱することが目指されもしたのであるが、それは真正の意味での変化であったのだろうか。この問題に関し、近年、ドイツで興味深い研究がなされたので、それを紹介検討しながら、社会と学校制度、中等学校制度との関わりを考えてみることにしたい<sup>4</sup>。

## 1. ギムナジウムとブラハトのギムナジウム研究

### (1) ワイマール時代のギムナジウム

ギムナジウム (Gymnasium) とはドイツの伝統的な中等教育機関である。

それは、日本流に言えば男子のみの中高一貫学校で、ラテン語、ギリシア語といった外国語や古典古代文化を主たる教育内容としたエリート学校である。3年制の予備学校を了えた教養市民層の子弟は、このギムナジウムで9年間（落第なき場合）学び、アビトゥーア（卒業試験）に合格すると、原則ドイツのどの大学にも自由に進学できた。彼らの大学卒業後には医者や裁判官、牧師や官吏、中等学校教師といったエリート職業が開けており、イギリスのパブリックスクール (public school) やフランスのリセ (lycée) と同様に、ギムナジウムは文化・教育を通して社会階層を再生産する装置として近代ドイツ社会で機能したのである<sup>5</sup>。

そのギムナジウムが、現代社会になると構造変化してきた。すでに19世紀の末葉から、教育内

3 二宮皓（編）『世界の学校』学事出版、2006年、38ページ参照。

4 小峰総一郎「あるギムナジウム」(『中京大学教養論叢』第47巻第2号、2006.10、参照。筆者はこれまで、ベルリンやハンブルクなど北部ドイツのプロテスタント（福音派）の、都市における新教育を研究してきたが、2005年の在外研究においては、南部ドイツ、カトリックの農村地域の教育研究も課題に設定した。筆者は、本稿で扱う上構学校のあったリュウテン町を訪れ、同校（戦後、「フリードリヒ・シュペー＝ギムナジウム」と改称）のハンス＝ギュンター・ブラハト校長と面談し、同校のアビトゥーア資料を参照することができた。

5 文化、教育が、社会的な不平等を再生産する装置として機能することについては、ブルデュー参照（ピエール・ブルデュー／ジャン＝クロード・パスロン [著] 宮島喬訳『再生産：教育・社会・文化』藤原書店、1991）。中等学校制度を通して、階層化されたドイツ社会を読み解こうとする仕事は、望田幸男の一連の研究が詳しい。望田幸男『ドイツ・エリート養成の社会史：ギムナジウムとアビトゥーアの世界』ミネルヴァ書房、1998、ほか。

容に自然科学や技術学を重視すべきだという動きは時代の大きな要求となり、中等学校制度に占める人文ギムナジウムの優位が崩される。近代語、さらには理科・自然科学を主要内容とする新しいタイプの中高等教育機関が陸続として誕生するのである<sup>6</sup>。だが決定的な出来事はワイマール革命（1918年11月9日）であった。革命後の、「ワイマール憲法」（1919年8月11日制定、8月14日公布・施行）は、庶民のための学校とエリートのための全学校制度の分裂を克服して、「統一学校」（Einheitsschule）を創出するとした。つまり、それまでの複線型学校体系に代わり、すべての者に共通な初等学校〈基礎学校（Grundschule）〉の上に、中級および上級の学校を単線型の学校体系として創出すると宣言したのである（第146条）。併せてギムナジウムに直結する私立予備学校の廃止も謳っている（第147条）。第二次世界大戦後の、日本の戦後改革に匹敵するような、ドラスチックな教育改革が目指されたと言ってよい。それをいま、帝政期の学校とワイマール共和国の学校体系図で比較すると次の通りである<sup>7</sup>。

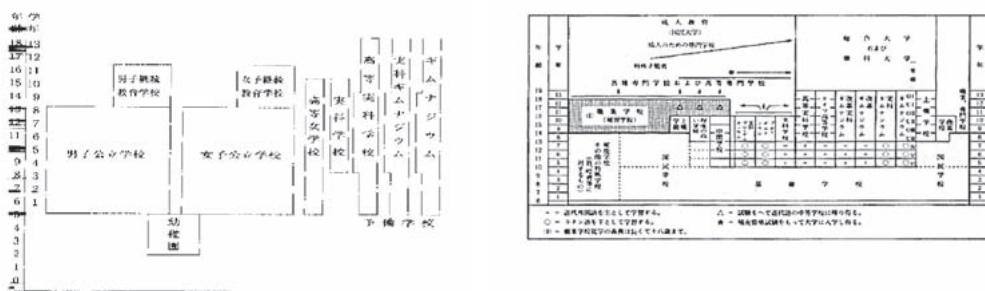


図1-1. 帝政時代のベルリンの学校制度(20世紀初頭) 図1-2. ワイマール時代プロイセンの学校系統図(男子)  
(Lemm, 1987) (伏見猛彌, 1931年)

見られるように、それまでの複線型の学校体系は、初等教育の段階から、将来ギムナジウムから大学への学習をめざしたエリートコースと、初等学校後は実社会に入ることをめざした大衆コースとに截然と分かれていたのである。それを、親の身分、財産に関わらず全国民子弟が共通の初等学校に通うとしたのである。これはまことに大きな変革であり、ワイマール共和国では教育を

6 Vgl. Lexis, W. (Hrsg.): Die Reform des höheren Schulwesens in Preussen. Halle a. S.: Verlag der Buchhandlung des Waisenhauses, 1902. また、日本では長尾十三二の研究が詳しい。長尾十三二〔ほか〕著『中等教育史2』〈世界教育史大系25〉講談社、1976、参照。  
7 Vgl. Lemm (Hrsg.): Schulgeschichte in Berlin, 1987, S. 86.; 伏見猛彌「独逸の教育」『岩波講座教育科学』第一冊、1931年。

通しての民主主義社会の建設が目指されたと言ってよい<sup>8</sup>。

しかし、制度が民主主義的な学校体系になったからといって、ギムナジウムがエリート教育機関であることに変わりにはなかったのである。ドイツの社会は「格差社会」である。初等学校終了後、ギムナジウムに9年間就学し、その後さらに4年以上に亘る大学就学に堪えられる家庭は、多くはない。また、その教育内容が、実際生活に役立つ知識・技術ではなく、死語であるラテン語を基本とした「学問のための学問」であっては、これは制度の入口は誰にも平等に開かれてはいるが、実際に、ここに就学を許されるのは特権階層だけである。ギムナジウムは、「教養」と「財産」を備えたそのような特定社会階層子弟に限られざるをえなかったのであった。

だが、ここにわずかな変化があった。ドイツ最大のラント、プロイセン邦では、図1-2の右端に位置する「上構学校 (Aufbauschule)」と称される短縮型の中等学校を新たに創設して (約100校)、「大衆」学校と「エリート」学校との接続を実現したのである<sup>9</sup>。

## (2) ブラハトとその研究書

この上構学校の成立と変貌を、カトリックのライン地方リュートン町 (Rüthen: Land Nordrhein-Westfalen, Kreis Soest, Regierungsbezirk Arnsberg) の1上構学校の事例を取り上げて究明したのが、本稿で検討する事例研究である。

Bracht, Hans-Günther: Das höhere Schulwesen im Spannungsfeld von Demokratie und Nationalsozialismus: ein Beitrag zur Kontinuitätsdebatte am Beispiel der preußischen Aufbauschule. Bern: Peter Lang, 1998. (=Studien zur Bildungsreform: Bd. 31)

ハンス＝ギュンター・ブラハト著：『民主主義とナチズムの緊張の場における中等学校制度——プロイセン上構学校事例に則した連続性問題論考』、ベルン：ペーター＝ラング社、1998年（教育改革研究第31巻）

- 
- 8 「統一学校」を全ドイツ国 (=ライヒ) レベルで実現するのはまことに困難だった。そこで国は、本問題を検討するため、1920年6月11日-19日、首都ベルリンに国内の著名な教育学者、教師、教育行政官を集めて全国会議 (全国学校会議, Reichsschulkonferenz) を開催した。ケルシェンシュタイナー、ガウディヒ、ナトルプ、エストライヒ、ペーターゼン、シュブランガーなど、当時の著名な教育家、新教育実践家を糾合して開かれたこの会議の結果は、大部な報告書として刊行されている。そこでの討議、報告には19世紀末から20世紀初頭にかけて展開された新教育 Reformpädagogik の思想を見ることができる。Vgl. Die Reichsschulkonferenz 1920: ihre Vorgeschichte und Vorbereitung und ihre Verhandlungen Amtlicher Bericht, erstattet vom Reichsministerium des Innern, Quelle & Meyer, 1921.
- 9 「橋渡し機能」(Zubringerfunktion)。クーレマンによる。Vgl. Kuhlemann, Frank-Michael: „Niedere Schulen.“ In: Berg, Christa (Hrsg.): Handbuch der deutschen Bildungsgeschichte. Bd. IV. 1870-1918: Von der Reichsgründung bis zum Ende des Ersten Weltkriegs. München: Beck, 1991, S. 199.

著者ブラハト氏は、1946年生まれ。自身が、戦後、フリードリヒ・シュペー＝ギムナジウムと改称された同ギムナジウムの卒業生である。大学では社会科学とスポーツ学を修め、同ギムナジウムの教員、のち校長となった。教員生活の傍ら、パーダーボルン大学のヴォルフガング・カイク教授（Prof. Dr. Wolfgang Keim）のゼミナールに参加。同校の学校文書館に収められた膨大なアビトゥーア試験記録資料を分析して、ワイマール時代からナチズムの時代のギムナジウム教育史を解明、博士論文にまとめたのである。

本博士論文は、カイク教授が編集するドイツで定評のある教育史研究叢書『教育改革研究』シリーズに収められ、1998年にこれの第31巻として刊行された。全767ページにわたる詳細な研究は、同シリーズの中でもひとときわ光彩を放っている。筆者（小峰）は、それまで行ってきたドイツの新教育研究を発展させようとして本書に行き当たった。筆者はその研究内容に打たれ、2005年の在外研究の折に同校を訪れてブラハト氏と面談、研究の中心資料となったアビトゥーア資料も閲覧させていただいたのである<sup>10</sup>。

### （3）本書の構成と出色

本書の構成は次のごとくである。

まえがき
<b>A. 序論</b>
I. 本テーマに取り組んだ動機と個人的関心
II. ナチズムーファシズム関係をめぐる基本的問題
III. 特殊文献・資料論、問題設定の展開
<b>B. ワイマール共和国並びに国家社会主義時代のプロイセン上構学校の設立と発展</b>
I. 上構学校運動
II. プロイセンにおける上構学校思想の転換
III. ワイマール共和国のプロイセン上構学校の発展
IV. 総括と評価
V. ナチズムへの移行の中のプロイセン上構学校、並びに1937年までのナチズム初期数年の間のプロイセン上構学校
<b>C. 邦立リューテン上構型ドイツ高等学校</b>
I. ワイマール共和国とナチズム初期の都市リューテンの経済・人間・社会構造とその展開
II. リューテン上構学校の設立
1. リューテン町・警察区・郡    2. カトリック主義    3. PSK〔州学務委員会〕と文部省
III. 1932年の最初のアビトゥーアまでの上構学校の発展
1. 建設期1926-1930    2. 確立期1930-1932    〔3. 総括と評価〕
IV. ナチズムへの移行と1937年までのナチズム初期数年間
<b>D. 結論と展望</b>
文献、索引

10 遠い日本からの来訪であったので、地方紙が面談のことを記事にしてくれた。（注4参照）

ブラハトの研究の出色は、何よりも、カトリック地方の1上構学校の個別史であるという点にある。一般に上構学校（Aufbauschule）という点、その多くを占める「ドイツ高等学校」（Deutsche Oberschule） [= 「文化科」 Kulturfächer —— 宗教、ドイツ語、哲学概論、歴史、公民、地理の6科を「文化科」と一括したドイツ学中心のカリキュラム —— を主内容とする新中等学校] と混同されたり、ドイツ学重視の教育内容のゆえに、また、これを主導したプロイセン文部参事官ハンス・リヒャート（Hans Richert, 1869-1940）の思想により、先験的に「国家主義的」と断じられたり、さらには、中等学校の経済合理化の側面に注目されることが多い<sup>11</sup>。しかしその具体相を、個別学校史レベルで、それも、そこにおける教育実態に即して解明することはほとんどなかった。

それに対しブラハトの本書は、ギムナジウム修了試験（=大学入学資格）の論文ならびに筆記・口述試験記録を通して当代学校で行われた教育実態を再構成するという着眼点、ならびに、大戦（第二次世界大戦）でも失われずほぼ完全に保存された当校学校文書館資料および州文書館資料を駆使するという資料活用の点からも、まことにユニークなギムナジウム教育史である。これは当校関係者ならではの成果と言えるだろう。

## 2. リューテン上構学校の教育

リューテンが位置するのは、北ライン・ウェストファーレン州ゾースト郡（Kreis Soest）である。郡の中心都市ゾースト市は、塩取引で栄えたかつてのハンザ同盟市。城壁で市域が囲まれた伝統的中世都市で、今日その城壁は疎水沿いに市民の格好の遊歩道となっている。春には特産のアスパラガス料理が多くの観光客を引きつける。これに対し、郡の南端にあるリューテン町は農業の町。畑と山とに囲まれたのどかな地方都市である（人口は今日約1万人）。町の中心に役場や学校が集まり、ここが町民の精神的文化的拠り所である。ここに存在した師範学校が、ワイマール時代に上構学校に再編され、短縮の中等学校となって波瀾の歴史を刻むのである。

### （1）上構学校の成立

#### ①町の状況、町民層

町は、ワイマール時代に人口2,400人。戸数444戸（1931年）という典型的な小農村であった。

11 Vgl. Eilers, Rolf: Die nationalsozialistische Schulpolitik. Köln/Opladen: Westdeutscher Verlag, 1963; Müller, Sebastian F.: „Zur Sozialisationsfunktion der höheren Schule. »Die Neuordnung des preußischen höheren Schulwesens« im Jahre 1924/1925“. In: Heinemann, Manfred(Hrsg.): Sozialisation und Bildungswesen in der Weimarer Republik. Stuttgart: Ernst Klett Verlag, 1976.

大農は少なく、ほとんどが小農家。304戸の農家の内訳は次の通りである<sup>12</sup>。

表2-1. リューテン町の農業規模（1931年）

農業規模	戸数	割合（％）	農地
小農（Kleinbauer）	240	79	～20モルゲン
〔中農〕	〔52〕	〔17〕	〔20～60モルゲン〕
大農（Landwirt）	12	4	60～モルゲン
全体	304	100	

（出所：Bracht, S. 269より小峰作成。〔 〕は小峰）

## ②師範学校（1876）から上構学校（1926）へ

リューテンはリップシュタット郡（Lippstadt——当時）南部の、文化の中心であった。それを象徴するのが、師範学校（Lehrerseminar, 1876設立）と付属小学校（Übungsschule）の存在である。大きな建物と校庭を擁するこのカトリックの師範学校に、1926年までに約1,000名の学生が学び、近郊の小学校のカトリック教員となって行った。生徒たちはリューテン町や近在から来ていたが、通学する者は少数で、大部分は町に下宿を求め、宿泊生として同校に学んだ。生徒らは貧しい中で勉学に励み、のちに小学校教員となって行ったのである。師範学校は文化の息吹を伝える場であった<sup>13</sup>。それが、第一次世界大戦後、リューテン師範学校は、ドイツの経済危機と学制改革に直面し廃止の危機に見舞われた。だが、プロイセン邦の中等学校改革、「リヒャート改革」で、当校はドイツ文化中心のドイツ高等学校という中等学校（当校ではラテン語を課す）に編成替えをしてこの危機を脱するのである<sup>14</sup>。

プロイセン上構学校<sup>15</sup>の成立史のポイントは次のようである<sup>16</sup>。

- 
- 12 Vgl. Bracht, Hans-Günther: Das höhere Schulwesen im Spannungsfeld von Demokratie und Nationalsozialismus: ein Beitrag zur Kontinuitätsdebatte am Beispiel der preußischen Aufbauschule. Bern: Peter Lang, 1998, S. 269.
- 13 2014年春、NHK 朝の連続ドラマ『花子とアン』が放映されている。主人公花子（村岡花子）は、山梨県甲府の貧家に生まれたが、東京の私立修和女学校（東洋英和女学院）に学び、のち翻訳家となる。これに対し、幼馴染みの朝市（木場朝市）は、小学校卒業後農家を継ぐも、学問への夢を諦め切れず、授業料無料で寄宿舎を備える師範学校に学んで母校の小学校教員となった。戦前日本で、貧しい地方農村子弟に開かれたほとんど唯一の中等教育の場が師範学校であった。リューテンの師範学校も、そのような地方農村子弟に許された数少ない中等教育機会であったと言えよう。
- 14 Vgl. Bracht, S. 275-288.
- 15 プロイセン文部省（編）（小峰総一郎訳）「ドイツ高等学校・上構学校教則大綱」『中京大学教養論叢』第34巻第1号, 1993.7; ——「プロイセン中等学校制度の新秩序」『中京大学教養論叢』第35巻第1号, 1994.9; ——「ハンス・リヒャートとプロイセン中等学校改革」日本教育学会『教育学研究』第63巻第4号, 1996.12, 参照。
- 16 Richert, Hans(Hrsg.): Richtlinien für einen Lehrplan der deutschen Oberschule und der Aufbauschulen. Berlin: Weidmann, 1928, 4. Aufl.(Weidmannsche Taschenausgaben von Verfügungen der Preußischen Unterrichtsverwaltung / herausgegeben v. Hans Güldner u. Walter Landé, Heft 6), S. 190.

表2-2. 上構学校史年表

年月日	省 令 名 (Erlass)
1922. 2.18	・ドイツ高等学校・上構学校覚書 [リヒャート起草]
11. 8	・プリマ級分離
12.19	・上構学校に関する協定
1923. 5. 5	・上構学校生徒受入 [省令]
1924. 3.13	・『ドイツ高等学校・上構学校教則大綱』 [リヒャート起草] 実施省令
3.15	・時間数表注解
3.17	・O II 進級 [省令]
1925. 4. 6	・『教則大綱 (1925)』 実施省令
4.21	・上構学校生徒受入 [省令]
5.19	・上構学校生徒受入 [省令]
7. 1	・ドイツ高等学校に関する協定
1927. 2. 7	・プリマ級分離
12.21	・アビトゥーア成熟資格
1928. 6. 5	・バイエルン、アビトゥーア成熟証承認

(出所：Richert: Richtlinien für D.O. u. A.S., S.190.[ ]小峰)

リューテン師範学校の廃止はリップシュタット郡の文化危機を意味し、町にとりこれは重大問題であった。そのため町や教会、文教当局は中等教育機関の廃止をとどめるべく、師範学校の上構学校への改組をめざした。しかし、近隣市との競合から、本計画は暗礁に乗り上げる。だが、リヒャート改革の最終局面に、他州と隣市での設立見送りによって、リューテン師範学校はプロイセン邦最後の100校目の「上構学校」となり、ドイツ高等学校型上構学校として存続を果たすことができたのであった。

## (2) 上構学校の教育

リューテン上構学校は1926年の設立から生徒を受入れ、1931年の復活祭に6年級を入学させて6年制上構学校は完成した。そして翌1932年春に、プリマ生が初のアビトゥーアに至るのである(今回は、ナチズム以前のこの時期までに限ってリューテン上構学校の教育を検討してみることにした)。

表2-3. リューテン校の歴史 (1876-1995)

年	事 項
1876	師範学校 (Lehrerseminar) 設立
1926	上構学校へ改組
1926	①初代校長シュニーダーテュース Philipp Schniedertüns (1926-1930, 6年間)
1930	②代校長 フルック Hans Fluck, 1930-1932, 2年間)
1931/32	上構学校完成, 第1回アビトゥーア生輩出
1932	③代校長 シュタインリュッケ Heinrich Steinrücke, 1932-1945, 13年間在職)
1945	④代校長 ポシュマン Poschmann
1966/67	近代語ギムナジウムの併設部に拡大



1990/91	上構学校廃止。本校卒業生は10卒で本体のギムナジウムへ編入
1995/96	最後の学年がアビトゥーアに至る

(Bracht, S. 27-29, 49-59, 433等から小峰作成)

### ①校長——シュニーダーテューンス，フルック

学校の相貌を決めたのは校長であった。とくに、カトリック神学の立場から、当校の初期教育に果たした2人の校長の役割は絶大だった。

#### a. シュニーダーテューンス校長 (Philipp Schniedertüns, 1926-1930, 6年間在任)

聖職者で一級教員のフィリップ・シュニーダーテューンスが、それまでの師範学校教育と新中等学校の教育とを架橋した。シュニーダーテューンスは、ドイツ語、ドイツ文化を重視し、体験を通してこれを深く獲得させようとした。ドイツ高等学校教育の教育目標を実現しようとしたのであるが、成果は必ずしも多くはなかった。彼の貢献は、むしろ音楽、芸術的方面、ならびに学校態勢確立に大きかった。当校は公式には宗派的ではないが、教員・生徒共にカトリックで授業もカトリック的。週1回、学校ミサを実施した。学校存続のため共学化を推進、女子比率は24%となった。在任4年間(1926-1930)で退き、のちパーダーボルンの国立女子高校(Pelizaus Schule)でドイツ語、地理を教えた。ナチ世界観に明確に反対して、かつ、教会と結びついて教えた、と調査書は記していた<sup>17</sup>。

すでに他校(オルペ教員養成所)で管理職(副校長)であったシュニーダーテューンスは、新リューテン上構学校を順調に船出させた。カトリック聖職者で規律重視、しかし、音楽や芸術を愛好するという、ライン地方の伝統タイプの教師(校長)であったと言えるだろう。リヒャート改革で重視された「ドイツ文化科」やドイツ的教養統一に、主観的には努力したが、成果は大きかった訳ではない。しかし、その後のナチズムに対しては、そのカトリック神学のゆえに明確な反対姿勢を示したことは注目される。

#### b. フルック校長 (Dr. Hans Fluck, 1930-1932, 2年間在任)

確立期(1930-1932)を担ったのが、思想家校長フルックであった。第1期生を2年のちに首尾よくアビトゥーア合格にまで至らしめる人物として、視学が見込んだ人物である。学位をもつ一級教員フルックは、すでに隣市の上構学校でラテン語教育に成果を上げていた。政治的には1911以来カトリック中央党員で、アルンスベルク市参事会員。1930年にリューテン着任。校長として①統一教員団形成し、②町民に各種催物を行い、信頼を得た。しかし1932年突然解任。隣市ギム

17 以上シュニーダーテューンス校長については Vgl. Bracht, S. 289-293.

ナジウムの校長勤務となるも、1934年、官吏任用法（1934. 6. 7）により解職。反ナチ的教育姿勢を問題にされたのだった。

彼の政治社会観は、強固なカトリック主義と、「新しいドイツの詩人」ゲオルゲに依りながら、「故郷、ラインラント、ドイツ」を結ぶ郷土主義であった。従軍体験を背後にもつフルックのロマン主義、民族・祖国聖化は、シュプレングルらドイツの教養協会のドイツ主義運動とも通じていた。これはナチズムの、アーリア的ゲルマン的な「血の神話」とは一線を画すものだった。ゲオルゲ（Stefan Anton George, 1868-1933）は一般にナチズムと親和的と言われるが、フルックのゲオルゲ解釈と大地のカトリック主義は、生徒らの自己発見・自己解放の民族的運動となって「隠れたカリキュラム」を形成したのだった<sup>18</sup>。

## ②教育内容

さて、ここで当校の教育内容につき寸描してみたい。ドイツ高等学校は、ドイツ文化を中心とするということが特色である<sup>19</sup>。そのため、宗教・ドイツ語・哲学概論・歴史・公民・地理の6科を「ドイツ文化科」（Kulturfächer）として、これが他の外国語科目、自然科学科目等の基底を成し、かつカリキュラム統一の軸とされた<sup>20</sup>。リューテン校では、フルック校長下の1931/32年に、上構学校が完成すると共に、カリキュラムも完成している。時間数は次のごとくである<sup>21</sup>。

表2-4. リューテン校のカリキュラム（1931/32）

	[科目 ●はドイツ文化科]	UIII	OIII	UII	OII	UI	OI
1.	●カトリック宗教	2	2	2	2	2	2
2.	●ドイツ語・歴史物語	5	5	5	5 (4)※	4	4
3.	ラテン語	-	-	5 (4)	4	4	4
4.	英語	7	7 (6)	4	3	3	3
5.	●歴史（公民）	3	3	3	4	4	4
6.	●地理	2	2	2	2	2	2
7.	算数・数学	5	5 (4)	4	4	4	4
8.	生物	2	2	2	1 (0) ?	1 (2) ?	1 (2) ?
9.	物理		2	2	2	2	2
10.	化学	-	-		2	2	2
11.	図画	2	2	2 (1)	2	2	2

18 Vgl. Bracht, S. 289-293.

19 Schmoltdt: Zur Theorie und Praxis des Gymnasialunterrichts (1900-1930). 1980, S.110.

20 「その際、次の一点だけは絶対に合意しておかなくてはならないと思う。つまり、ドイツ的教養内容を伝える文化科は、ドイツの中等学校すべての中心科目であり、これに全授業時間数のおおよそ3分の1を割り当てる必要があるということである。なぜなら文化科は、一方で我が国中等学校の教養統一を実現すると共に、他方で中等学校と大衆教育との接続を実現するものだからである。つまり、文化科は国民教育の主要な担い手なのである」（リヒャート）。（小峰訳）「プロイセン中等学校制度の新秩序」, 305ページ。

21 Vgl. Bracht, S. 329.

12.	裁縫	2					
13.	唱歌（音楽）	1	1	1	1	1	1
14.	体育・男子	4		4		4	
15.	体育・女子	4					
16.	協同学習	-	-	-	2 (1)	2 (1)	2 (1)
	〔計〕	31/32	33/34 (31/32)	31 (29)	31/32 (29/30)	31/32 (31/32)	31/32 (31/32)

※注（ ）はすべて1931.10.1からの時間数。

(Vgl. Bracht, S. 329.)

リューテン上構学校は、ドイツ高等学校型の短縮ギムナジウムである。リヒャート覚書にも、「1. [上構学校教材の考え方] ドイツ高等学校あるいは高等実科学校——これらには原則としてギムナジウムと同一の教育目標が設定されている」<sup>22</sup>と述べられている通りである。また、その地方の国民学校カリキュラムとの接続を重視している。「2. [教育方法上の留意点] ——生徒が多様な国民学校から来ていることを考慮して、上構学校では、国民学校で学んだ知識を尊重するものとする。しかし、知識を系統的に拡大させることを忘れてはならない。教材を拡大する場合、できるだけ基本型[9年制]中等学校に該当する課題と有機的に結合することが必要である。しかし、その土地の状況をとくに考慮して選ばれた典型教材は、これに代わって優先されなければならない」<sup>23</sup>と。この考え方がリューテン上構学校カリキュラムにどのように反映されているのかを、リヒャート教則大綱と比べて検討してみよう。基幹のドイツ文化科・自然・外国語、そして実技科目は、リヒャート教則大綱では次のようになっていた。（自由選択科目は省略した。）

表2-5. ドイツ高等学校型上構学校 [6年制] 時間配当

	[科目 ●はドイツ文化科]	U III	O III	U II	O II	U I	O I
1	●宗教	2	2	2	2	2	2
2	●ドイツ語	5	5	5	5	4	4
3	●哲学概論	-	-	-	-	1	1
4	●歴史	3	3	2	4	3	3
5	●公民	-	-	1		1	1
6	●地理	2	2	2	2	2	2
7	数 学	5	5	4	4	4	4
8	自然科学	4	4	4	5	5	5
9	第一外国語*	7 (6)	7 (6)	4 (3)	4 (3)	4 (3)	4 (3)
10	第二外国語*	-	-	4 (5)	4 (5)	3 (4)	3 (4)
	小 計	28 (27)	28 (27)	28	29	29	29
11	図 画	2	2	2	2	2	2
12	音 楽	2	2	2	2	2	2
13	体 育	3	3	3	3	3	3

22 (小峰訳)「ドイツ高等学校・上構学校教則大綱」, 361ページ。

23 同所。

合計	35 (34)	35 (34)	35	36	36	36
*注 英語を第一外国語に選んだとき、UⅢから0Ⅱまではカッコ内の時間数とする。 (小峰訳「ドイツ高・上構学校教則大綱」, p. 361)						

両者（リューテン校をリヒャート教則大綱と比較）から言えることは、大よそ次のようである。

- ①大原則として、上構学校教則大綱に忠実に従って展開されている。
- ②その中における若干の相異であるが、まず、第一外国語（英語）の開始年と翌年 UⅢ, UⅢが1時間多い。逆に上級の OⅡ, UI, O1 は1時間少ない。
- ③第二外国語（ラテン語）の開始年 UⅢに、1時間少ないことも認めている。
- ④理科は、開始年（UⅢ）は2時間少ない。
- ⑤唱歌（音楽）が全6年に1時間少ない。

つまり、国民学校（小学校）で未修の英語教育は上構学校開始時に手厚くしたということである。逆に上級3年間は1時間少ない。英語上達が認められることを見越していたということであろう。ラテン語は、教会等ですでに触れる機会があったことを想定しているためであろう。上構学校開始時時間数を1時間少なくすることも認めている。唱歌（音楽）が全学年リヒャート教則大綱より1時間少ない。これは、器楽設備（教員）が十分でなく、当面唱歌のみの音楽教育としたものである（将来器楽1時間の増を予定）。また、上級の理科と協同学習の減は、プロイセンの経費節減策のためであった。これら大枠のなかで、授業活動としていかなる教育が展開されているかは、次回以降の検討課題としたい。

### ③生徒たち

最後に生徒層につき検討と考察を行っておく。

#### a. 生徒の出自

まず生徒の社会階層を見ておく。開設当初と、完成年以後である<sup>24</sup>。

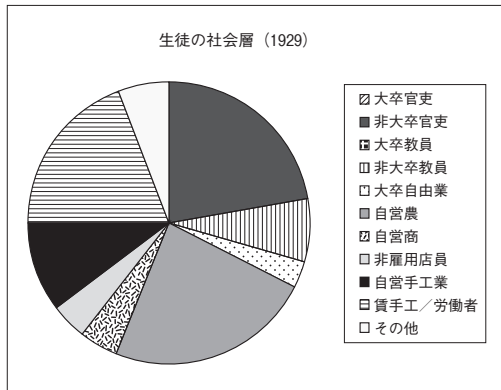
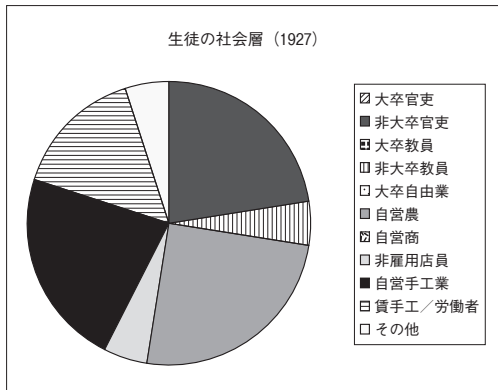
表2-6. 上構学校生徒の社会層（1927, 1929）

職業	1927		1929	
	数	割合 (%)	数	割合 (%)
大卒官吏	0	0	0	0
非大卒官吏	9 (男7, 女2)	22.5	15 (男11, 女4)	22
大卒教員	0	0	0	0
非大卒教員	2 (1, 1)	5	5 (3, 2)	7.4

24 Bracht, S. 298, 440.

大卒自由業	0	0	2 (0, 2)	2.9
自営農	10 (5, 5)	25	16 (12, 4)	23.5
自営商	0	0	3 (3, 0)	4.4
非雇用店員	2 (0, 2)	5	3 (1, 2)	4.4
自営手工業	9 (8, 1)	22.5	7 (7, 0)	10.3
賃手工／労働者	6 (5, 1)	15	13 (12, 1)	19.1
その他	2 (2, 0)	5	4 (4, 0)	5.9
合計	40 (28, 12)	100	68 (53, 15)	99.9〔ママ〕

(Bracht, S. 298)

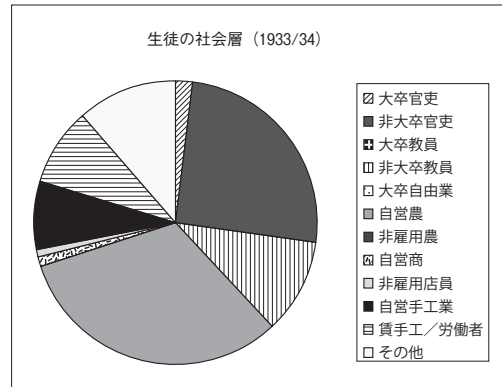


(グラフ化は小峰)

表2-7. 上構学校生徒の社会層 (1933/34)

職業	1927	
	数	割合 (%)
大卒官吏	2(男1, 女1)	2
非大卒官吏	26 (18, 8)	25
大卒教員	0	0
非大卒教員	11 ( 9, 2)	11
大卒自由業	0	0
自営農	33 (26, 7)	32
非雇用農	0	0
自営商	1 ( 1, 0)	1
非雇用店員	1 ( 1, 0)	1
自営手工業	8 ( 7, 1)	8
賃手工／労働者	9 ( 8, 1)	9
その他	12 ( 9, 3)	12
合計	103 (80, 23)	101〔ママ〕

(Bracht, S. 440)



これを見ると、上構学校開設当初1927年は、自営農、非大卒官吏、自営手工業が上位3位であったのであるが、完成時以後の1933/34年には、上位から自営農、非大卒官吏、その他、となっ

た。上構学校生徒の多くは地方エリート層の出自で、これはリヒャートのねらいであった、地方農村青年の生命力喚起、民衆的なドイツ的教養の育成、を十分に保障したとは言えない。

#### b. 入学、進路

生徒たちはリュウテン町よりも、近在から多く進学した。中には、ある雪の朝、馬と橇とで2時間半も苦闘して登校した女生徒もいた<sup>25</sup>。生徒の進学動機は、ドイツ高等学校（＝「ドイツ的教養」）という民衆的な学校理念、ないしそれを修得して郷土の小学校教員になるというのではなしに、ここを経由すればアビトゥーア（＝大学進学）に至れるという、今までにはなかった専門職キャリアへの道であった。生徒そして親を惹きつけたのは、内容ではなく「制度」にあった。

### 3. まとめ

リュウテンの上構学校「制度」は、リヒャートの文化科を基軸とした「ドイツ的教養統一」を達成したのだろうか。また、「ドイツ的教養」で想定された地方農村青年の健全な生命力を導き出したのであろうか。さらに、教科をグループ化し授業を柔構造化させたことによって、生徒主体の探究型新教育授業を保障したのだろうか。これらについては、少なくとも、これまでの範囲では否定的である。かつてベルリン・ノイケルンの上構学校で、フリッツ・カルゼン校長が実現したような、創意的な新教育実践、「共和国の担い手」となるという主体意志はここには希薄であった。むしろ「制度」が社会移動を促進したと言える。短縮中等学校たる「上構学校」は、このライン地方においては、理念としての民主主義＝中等教育拡大とはならず、地方有産者・中間層のより一層の社会上昇の装置として機能したのである。そのため、民衆的教養目標とは異なるラテン語も、大学進学に必要という理由から必修化され、重視されたのである（これには、地元のカトリック教会の意向も大きい）。

これまでの考察を通し、このライン地方の1ギムナジウムの形姿は以上のようにまとめられるであろう。それがナチズムの時代にはいかなる内実を備えたのかは、次の課題としたい。

#### \*謝辞

リュウテン上構学校（現、フリードリヒ・シュペー＝ギムナジウム）研究にご助言とご協力をいただいたハンス＝ギュンター・ブラハト校長（筆者訪問時。現在退職）に心より御礼申し上げます。

---

25 Vgl. Bracht, S. 323.

## 文 献

1. Bracht, Hans-Günther: Das höhere Schulwesen im Spannungsfeld von Demokratie und Nationalsozialismus: ein Beitrag zur Kontinuitätsdebatte am Beispiel der preußischen Aufbauschule. Bern: Peter Lang, 1998.
2. Die Reichsschulkonferenz 1920: ihre Vorgeschichte und Vorbereitung und ihre Verhandlungen Amtlicher Bericht, erstattet vom Reichsministerium des Innern, Quelle & Meyer, 1921.
3. Eilers, Rolf: Die nationalsozialistische Schulpolitik. Köln/Opladen: Westdeutscher Verlag, 1963.
4. Lemm, Werner (Hrsg.): Schulgeschichte in Berlin. Berlin (Ost): Volk und Wissen, 1987.
5. Lexis, W. (Hrsg.): Die Reform des höheren Schulwesens in Preussen. Halle a. S.: Verlag der Buchhandlung des Waisenhauses, 1902.
6. Müller, Sebastian F.: „Zur Sozialisationsfunktion der höheren Schule. »Die Neuordnung des preußischen höheren Schulwesens« im Jahre 1924/1925“. In: Heinemann, Manfred(Hrsg.): Sozialisation und Bildungswesen in der Weimarer Republik. Stuttgart: Ernst Klett Verlag, 1976.
7. Richert, Hans(Hrsg.): Richtlinien für einen Lehrplan der deutschen Oberschule und der Aufbauschulen. Berlin: Weidmann, 1928.
8. Schmoldt, Benno: Zur Theorie und Praxis des Gymnasialunterrichts (1900-1930). Weinheim/Basel: Beltz Verlag, 1980.
9. 黒田多美子 「ドイツにおける教育改革をめぐる論議と現状：ハンブルクの事例から」（『獨協大学ドイツ学研究』62, 2009.9）
10. 小峰総一郎 「あるギムナジウム」（『中京大学教養論叢』第47巻第2号, 2006. 10）
11. — 「ハンス・リヒャートとプロイセン中等学校改革」（日本教育学会『教育学研究』第63巻第4号, 1996. 12）
12. 長尾十三二 [ほか] 『中等教育史2』〈世界教育史大系25〉講談社, 1976年
13. 二宮皓（編）『世界の学校』学事出版, 2006年
14. 『ニューズウィーク日本版』, TBS プリタニカ, 1991年12月5日号
15. ピエール・ブルデュー／ジャン＝クロード・パスロン（宮島喬訳）『再生産：教育・社会・文化』藤原書店, 1991年
16. 伏見猛彌「独逸の教育」『岩波講座教育科学』第一冊, 1931年
17. プロイセン文部省（編）（小峰総一郎訳）「ドイツ高等学校・上構学校教則大綱」（『中京大学教養論叢』第34巻第1号, 1993. 7）
18. プロイセン文部省（編）（小峰総一郎訳）「プロイセン中等学校制度の新秩序」（『中京大学教養論叢』第35巻第1号, 1994. 9）
19. 望田幸男『ドイツ・エリート養成の社会史：ギムナジウムとアビトゥーアの世界』ミネルヴァ書房, 1998年
20. 文部科学省「我が国及び諸外国の学制について」（第14回教育再生実行会議資料, 2013年10月31日）  
<http://www.kantei.go.jp/jp/singi/kyouikusaisei/dai14/gijisidai.pdf> [最終閲覧2014年6月]

(2014. 6. 28)